

国際協力の素地を身につけ、国際交流をしよう

所属	浜松学院中学校	実践者	鈴木 翔大
対象	中学1年生	時間数	24時間
場所	教室	実践教科	総合的な学習の時間
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りや世界の当たり前にあるものを知り、自分の環境が恵まれていることに気付く ・自分がいる環境が恵まれていることに気付く ・人に支えられていることに気付き、思いやるために大切なことを考える ・日本だけでなく海外の仲間に視野を通して、様々な国の状況を学ぶ 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1-2	<u>身の周りの当たり前にあるものと世界の当たり前を知る</u> フォトランゲージを使い、日本と水の環境が違うことを確認する。そして派生図を用いて当たり前にあるものの存在価値を考えて、自らの当たり前と世界の当たりの違いを知る。	エチオピアで撮影した水貯めの写真、井戸の写真、模造紙、ペン、パワーポイント
	3-4	<u>自分がいる環境について考えよう</u> 日本とエチオピアのデータ対比表を用い、日本と比べた世界の現状を知る。また、「もしも学校に行かなかった場合」と「学校に行くことのできるか」を考え、自らの置かれた環境が恵まれていることを知る。	対比表(就学率・寿命・電気使用量など)、模造紙、ペン、パワーポイント
	5-7	<u>支え合いについて考えよう</u> 生活が他の人の支えで成立することに気づき、自らも支えることができるように宣言をする	付箋、模造紙、ペン
	8-10	<u>国際交流校の国について学ぼう</u> 国際交流相手であるキルギスについて授業そして JICA 中部なごや地球ひろばへの訪問プログラムを通して知る。	パワーポイント、A3 用紙、ペン JICA 中部訪問
	11-12	<u>国際交流校とお互いに自己紹介をしよう</u>	自己紹介カード、色鉛筆
	13-16	<u>国際交流校にプレゼントをしよう</u> 日本の四季をテーマにしたちぎり絵を製作する。	折り紙、額、糊
	17-19	<u>国際交流校とスカイプで繋がろう</u> 相互に事前に調べたお互いの文化や情報を交換、発表	Skype、インターネット、PC、web カメラ、情報ソース
	20-24	<u>国際交流校と絵の共同制作をしよう</u> テーマをもとに国際交流校と絵の共同制作	キャンバス、絵の具、筆
成果	学習者の普段の学校生活の中で、細かいことに対する気配りや感謝の気持ちが見られるようになった。また、海外の現状を知ることによって海外に興味を持ったり手を差し伸べる方法はないのかという声が聞こえてきたりした。また、英語を使うことへの積極的な姿勢も見られた。		
課題	開発途上国の現状を知ることによって「日本は恵まれている」ということで学びが止まってしまう、その先まで深めることができなかつた部分もあった。また交流に関しては、輸送やインターネット環境などの問題でスムーズにいかない面もあった。		
備考	第1回のアクティビティは公益財団法人浜松国際交流協会、JICA 中部、はままつ国際理解教育ネット共催の「国際理解教育ファシリテーター養成講座第4回」でも実践した。		

[授業実践の詳細]

1-2 時限目「身の周りの当たり前にあるものと世界の当たり前を知る」

この時限のねらい

- ・身の回りの当たり前にあるものと世界の当たり前を知る。

1 子どもの活動の流れ

① フォトランゲージ

- ・<教材1>で使用した写真について「写真のど真ん中にある物体は、何に使うものか」をグループで話し合い、答えを出した。

② フォトランゲージ

- ・<教材2>で使用した写真について「写真のど真ん中にある木で囲まれたものは井戸であるが、多くの問題点がある。その問題点とは何か、考えてみよう」というテーマのもと、グループで答えを一つずつ出した。



<活動①の様子>

③ ダイヤモンドランキング

- ・「水」「お金」「食べ物」「洋服」「家」「電気」「娯楽」「石炭」に加え、話し合いを活性化させる目的で「班の中で一つ必要なもの」を班で話し合い、必要なもの順にダイヤモンドランキングを作った。

④ 派生図

- ・「もし、水がなかったらどうなる?」について、派生図をグループで作った。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 活動①では生徒は背景にあるトイレをヒントに答えを考えた。主に生徒たちからは「飲み水を貯めるもの」「手洗い場」など、何らかの形で水に関する答えが出てきた。
- ◇ 活動②では、事前にエチオピアの街で撮影した動画を見せたためか「溺れる」「フンが落ちる」「水が汚い」といったピンポイントで問題点をあてるグループが多くあった。
- ◇ 活動③では、半数以上のグループが「水」が最重要だと答え、それ以外のもので出た最重要の答えは「お金」がほとんどであった。また班で出す答えが「酸素」とした班は「酸素」が一番に来た。
- ◇ 活動④では、答えが派生すればするほどネガティブな答えが出ていた。

【この時限を通した感想カードより】

- ・「この勉強をして、水の大切さやエチオピアの人々の大変さを知ったので、そういった人たちの人のことを考えて、水を大切に使用したり、食べ物を大切にすることを心掛けたいです。」
- ・「日本では、当たり前だと思っていることが、世界の当たり前ではないと改めて感じ、いい経験になりました。」

3 使用した教材

<教材1> エチオピアにて撮影したトイレの水貯めの写真

<教材2> エチオピアにて撮影した井戸の写真

3-4 時限目「自分がいる環境について考えよう」

この時限のねらい

- ・自分がいる環境が恵まれているということに気づく

1 子どもの活動の流れ

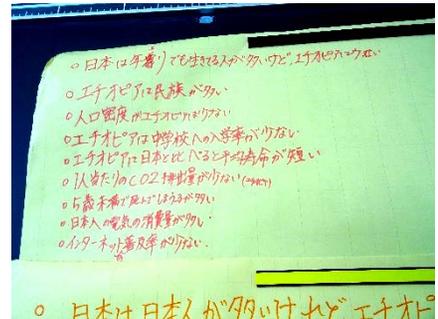
- ① データを見て考える
 - ・エチオピアの就学率・寿命・識字率などのデータの表記された対比表をそれぞれの生徒に配布し、グループ内で、そのデータから考えられることを話し合う。
- ② 派生図
 - ・半分のグループに「もしも学校に行かなかったらどうなるか？」を、もう半分のグループには「学校に行くときどのようなことがあるか？」を考えさせた。
- ③ 協力隊ビデオを放映
 - ・エチオピア配属の牧氏へのインタビュー映像を放映。この映像の中に「将来は自分で敷かれたレールではなく自分のやりたいと決めたらできる環境があるということを知り、自分の将来は自分で決めべきだ」というメッセージが込められている。



<活動①の様子>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 活動②の対比表を見る活動で、主に生徒が興味を示したのは小学校の就学率と小学校卒業率の違いであった。生徒なりに「お金がないからかな」といった意見を出し合っていた。
- ◇ 活動③では「学校に行かなかった場合」にはネガティブな回答が、「学校に行ったら」にはポジティブな回答が目立った。
- ◇ 活動④の映像は、放映をただけではあるが、のちに書いた振り返りシートにおいて触れる生徒が何人かいた。



<活動①の成果例>

【生徒のふりかえり】

- ・今日の講座を通して、日本は全員が小学校を卒業し、中学校に行っているのに、エチオピアは半分くらいしか行けていないということを知りました。当たり前のことではないのだと思いました。
- ・初めて学校に行かなかったらどうなるかを考えてみました。そうしたら、仕事・会話ができなくなり、生活ができなくなります。なので私は日本で生まれ、学校で生活できてよかったです。
- ・学校があるからできることは、たくさんあると思った。だからサボったりせず、1日1日を大切にしたい。またありがたく思いたい。
- ・授業の最後で見たビデオの「自分の人生は責任を持ってください」という言葉に責任を持って生きて自分で決めていきたいと思いました。

3 使用した教材

- <教材3> 日本・エチオピア対比表
- <教材4> 協力隊インタビュー映像

5-7 時限目「支え合いについて考えよう」

この時限のねらい

- ・ 人に支えられていることに気付く
- ・ 人を認め、思いやるために大切なことを考える

1 子どもの活動の流れ

- ① 今日お世話になったものについて考えよう
 - ・ 付箋に「朝から今までにお世話になったモノ・人」を1項目につき1枚を貼る。その後、模造紙に「人との関わりがなければお世話になれなかったもの」「その他」に分類した。
- ② 他者との繋がりがなくなったらどうなるか考えよう
 - ・ 派生図を用いて「他者との繋がりがなくなるとどうなるか」を考えた。
- ③ 支え合うために大切なことを考えよう
 - ・ ブレーンストーミング方式で「支え合い・思いやるために心がけるべき行動・言動」を考えた。
- ④ 人を認め・思いやり宣言をしよう
 - ・ ブレーンストーミングを通してでたアイデアを元に「認め合い・思いやりをするために・・・を宣言します」という形で宣言をした。



<授業の様子>



<活動①の成果例①>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 活動①では多くのお世話になったものを考えることができ、多くの班で「人とのつながり」があることを知った。
- ◇ 活動②と③を通して人とのつながりや思いやりの大切さを実感した。
- ◇ 活動④では生徒たちから「人と関わる」「笑顔でいる」「人の良いところを見つける」「人の気持ちを考える」などといった肯定的な言葉を使った宣言が多く聞かれた。



<活動①の成果例②>

「人との繋がりのないものはない」という理由で「その他」の項目は作らなかった

3 使用した教材

<教材5> 2016年度 開発教育指導者研修(実践編)第2回
配布資料 p 5 を参考

13-16 時限目「国際交流校にプレゼントをしよう」

この時限のねらい

- ・ 自国の事象を体験的に学ぶ

1 子どもの活動の流れ

- ① 紹介する季節を設定
 - ・ クラスを「春」グループ、「夏」グループ、「秋」グループ、「冬」グループといった具合に4つのグループに分け、担当を決める。

② 制作する季節の絵の構想作り

・各季節から連想される情景などを話し合い絵のテーマとして選択する。

③ ちぎり絵の制作

・折り紙をちぎりながら下書きの線に沿いながら黒色を貼り、それぞれ色のつく部分は出来る限り細かく、手でちぎる。貼っていない部分がないようにすべてを何らかの形で折り紙貼る。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 「ちぎり絵」の手法を知らない生徒もいたが、日本独特の手法を感じていた。手間のかかる作業ではあったが、完成が近づくのが目に見えていたためか楽しみながら取り組んだ。

◇ グループ活動で行ったが、色紙をちぎる生徒、絵に直接貼っていく生徒と各々に役割分担をしている様子で協力して作業をすることができた。



<完成作品:春>



<完成作品:夏>



<完成作品:秋>



<完成作品:冬>

17-19 時限目「国際交流校とスカイプで繋がろう」

この時限のねらい

・日本の紹介を通して、文化等を学ぶ。

1 子どもの活動の流れ

① 紹介するテーマの選択

・「日本に関するテーマ」というもとに各グループ自由に選択をした。日本に限らず地域の紹介でも良いことにしており、「浜松まつり」「ジブリ」「温泉」などが出てきた。

② 紹介するテーマの調べ学習

・図書室にある本を利用して、発表する内容を調べた。

③ 発表原稿作成

・調べた内容を発表するため、原稿を作成した。原稿を作るにあたって質問のあるものは先生にたずねるなどして、原稿を完成させた。

④ スカイプ交流本番

・前半は本校からの発表、後半は相手からの伝統舞踊の発表鑑賞とキルギスに関するクイズ



<活動②の様子>



<活動④の様子>

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 活動③にあたって、スカイプで中継をするという特徴を利用して、写真の使用やスクリーン共有機能を用いて動画を利用するなどの工夫が見られた。また「浜松まつり」を紹介するグループでは、実際に浜松まつりで演奏する音を実演したグループもあった。相手からも「知っている」「わかりやすい」などの言葉がきかれた。
- ◇ ここで行ったアンケートでは、「もっと交流したくなった」という声が多かった。
- ◇ 相手方に青年海外協力隊員がおり、日本語で発表したものをキルギス語に翻訳するといった形になることが多く、英語を使うと言った機会はあまり作ることができなかった。

3 使用した教材

- <教材8> 『絵でわかる 英語で紹介する日本文化』桑原 功次著／ナツメ社
『1分間英語で日本のことを話す』広瀬直子著など／中経出版
- <教材9> Skype

20-24 時限目「国際交流校と絵の共同制作をしよう」

この時限のねらい

- ・一つの作品を相手と共同制作することで共通点に気付く

1 子どもの活動の流れ

- ① 相手と絵のテーマについて交渉
 - ・日本とキルギスの共通点を模索。あるキルギスにある一説によると「キルギス人と日本人が兄弟で、肉が好きな者はキルギス人となり、魚を好きな者は東に渡って日本人となった」をモデルにした。
- ② プロジェクトリーダーを中心とした下書きの構想作り
 - ・各グループから下書き案を募り、下書き案をもとにプロジェクトリーダーが下書きの構想を作った。
- ③ 下書きの制作
 - ・実際にキャンバスに下書きを描く作業。
- ④ キャンバス上に制作
 - ・グループごとに担当時間を配分し、各生徒が制作に関わることができるようにする。
- ⑤ 相手校へ作品の引き渡し
- ⑥ 完成した作品の受け取り(本レポート提出時には未着)



<完成作品>
右側はキルギス側が制作

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 写真にあるような作品が完成した。

■ 全体を通して

1 授業の様子

教師海外研修の中で国際協力をするためには、まずは隣の人を思いやる気持ちが無ければ世界の遠くにいる誰かに協力することはできないということを学んだ。「わたし」「あなた」「みんな」を大切にすることからはじめてから世界に目を向けさせたいという願いからこのプログラムを組んだ。今後も継続的に指導していきたい。

2 参考文献・資料

- 1) 2016 年度 開発教育指導者研修(実践編)第 2 回 配布資料 p 5
- 2) 『教室から地球へ 開発教育・国際理解教育 虎の巻一人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ』／開発教育国際理解教育アクションプラン研究会編／東信堂 2006